

タイトル「浜辺があつてそこに」

著者名 くろいわゆうり

あらすじ 再会したアヤと海辺を歩く俺。変わり果てた町で出会った子どもたちとの交流の果てに…。

文字数 2043

土埃が舞っていた頃の通学路の面影は、もうどこにもなかった。見通しの良いアスファルトの道が、まっすぐ海へとつづいている。両側には、コーヒーチェーンのロゴや、北欧発祥の家具店の大きなウインドウがならび、そこに映るガラス越しの海の光が、かつて俺たちが歩いた思い出の道を完全に上書きしていた。潮の匂いと焙煎豆の甘い香りが混ざって、どちらも本来の匂いを失っていた。

「ここらへんも随分と変わったな」俺がそう言うと、アヤは間髪を入れずに「どこが？」とかえした。「卒業した頃とまったく別の町だから」とつづけると、「何も変わってないし」と短く言った。その言葉の表面は平坦だったが、声の奥には風より冷たい硬さをかんじた。

海への道の途中に、昔と変わらない砂利の駐車場があつた。車を降りると潮騒の匂いがした。それだけが、確かに同じだった。俺は無理に言葉をつないだ。

「懐かしい場所だよな」

高校時代、この浜では「砂の芸術」という催しがあつた。クラスごとに砂像を作る、という、いわば「札幌雪祭り」の砂版。もちろん、その日限りの代物で、数時間後、夜の波に流される。「消えること」まで含めての行事だった。「青春のように儂いね」などとだれもおもわなかつただろう。そんな詩的な奴はあの学校にはいなかった。

「私は蚊帳の外だったけどね」とアヤは言った。

「イトウ君はカースト上位組だったから、そりゃ楽しい思い出だ」

「そんなことないよ」と俺は反射的に返したが、自分の声が妙に軽く聞こえた。

「そんなことない、って言える人が、だいたい上位にいるの」アヤは、独り言のように言葉を足した。

再会してからずっと会話は続いていたが、感情がどこにも届かないまま、ただ言葉だけが風に流れていた。俺の中で「アヤ」という人物は時間を経ても変わらない像として保存されていたが、目の前の彼女は、姿形は同じなのに、言動や動作のひとつひとつがまるで他人のようだった。もしかしたら、俺は真に「別人」と再会しているのかもしれないなかった。

ふと、前方にちいさな人だかりがみえた。中学生くらいの子どもが五、六人、円になってなにかを囲んでいる。アヤが俺の肘を突いて顎で示した。「ねえ、あれ」

「中坊がいるな。亀でもいじめてんじゃないか」と俺はから笑いをした。

「…」

アヤは眉を寄せて少し考えるような仕草をしたあと、突然走りだした。俺は慌てて追った。

「きみたち、なにをしてるの？」となんとかアヤより先にその場にたどり着いた俺が尋ねると、子どもたちは、だれもなにも答えなかった。彼らの沈黙は、こちらの存在を確認しているようでもあり、存在を否定しているようでもあった。

「最近の子は知らない大人と話すなって教育されてるのよ！」アヤが口を挟んだ。その声は不自然に明るかった。しかし、その明るさの下に、なにか焦げたような匂いがあった。

「名刺でもみせれば？」

「将来のリード獲得だな」俺は笑いながら、財布から名刺を取りだした。とそのとき、円の中のひとりの少年が立ち上がった。俺より背が高く、サイドを刈り上げ、前髪に金のメッシュをいれている。俺は咄嗟に身構えた。

「僕はコバヤシ・オウジと申します」予想に反して、声は清潔だった。彼はデイバッグから生徒手帳を取りだし、律儀に差しだした。俺は身体の緊張をほどいた。

アヤは俺の手から名刺を抜き取り、声にだして読んだ。

「Nエージェンシー、第二クリエイティブ局、クリエイティブディレクター、イトウユウキ」

「立派だねえ。凄いねえ。かつこいいねえ」アヤは俺をみずに、名刺の印字を眺めて言った。俺は軽く肩をすくめた。残念ながら、この国では名刺と婚姻することはでき

ない。

「で、なにをしているのかな？」

「スズメが亡くなっていたので、お墓を作っていました」

コバヤシ少年が答えた。円の中央には、ちいさく盛り上がった砂山があり、その上に羽根が一枚だけ置かれていた。

「偉いな。現代の供養の極みだ」と俺が言うと、アヤがこう呟いた。「それ、メジロの可能性が高い」

「この町のシンボルですよ」と、隣の少女が言った。

するとアヤは少女の顔をまっすぐみつめた。その視線は、質問ではなく検査のようだった。

「じゃあ、メジロの特徴、知ってる？」

絶対的な沈黙。少女の目がじわじわと赤くなり、涙が頬にながれた。

「す、すみません。僕たち、門限があるんで」みかねたコバヤシ少年が機転をきかせた。その声はひどく震えていた。全員が深くお辞儀をし、砂を蹴るように走り去った。

それから、アヤは深く息を吐き、バッグから煙草を取りだした。バニラ色のキャスター。一本だけ抜いて、ジッポを鳴らして火をつける。煙を吸い込み、すぐに砂の上に突き刺した。

「線香の代わり」彼女はそう言った。俺は頷いたが、頷いた理由は自分でもわからなかった。そしてアヤはしゃがみ込み、空になった箱に砂を詰めはじめた。最後に白い貝殻をひとつ入れ、蓋を閉めて海へ放った。箱は、波の上でわずかに浮き、光をひとつ反射して沈んで、それから沈みきった。(了)